



# 歴史を知ると 塩の道はもつと楽しい

文献によると、天正から慶長の年代（400年くらい前）、今の香南市香我美町岸本から吉川町にかけての海浜では、製塩が盛んに行われていました。

塩の生産地と奥地を結ぶ重要な産業道だった塩の道は、塩に限らずさまざまな生活物資が運搬され、相互往來の往還道として利用されてきました。

その土地の特徴を生かした道の名で、七浦往還、日浦往還、徳善往還、赤岡往還などと呼ばれ、各地に残る地名にも、「塩」「シオタキ」「塩が峯」など、塩の字が残る地名が多くあります。

現在は、物部町大柵から赤岡町を結ぶ約30kmの区間を塩の道として整備していますが、これはほんの一部。大柵からさらに奥に入り、別府の四ツ足峠、久保の蕪生越え、笹を越えて祖谷に至る道と、3つの往還道が四国山地を越えて徳島へとつながっていました。



## 野道山道、峠越え 遠い昔に思いをはせる

白杵店屋跡を後にすると、七浦往還と呼ばれた道に入る。似たような谷と尾根の地形が、繰り返したという。上り下りを繰り返しながら、スギ林の中を歩く。道幅は広くない。この山道を、大きな荷物を背負い、馬を従えて歩いた先人たちを思うと頭の下がる思いだ。

庄谷相の集落を抜け庄谷相屋敷丁石を過ぎる。祠の馬頭観音に祈りをささげ、先の道筋を見上げる。ここから先、源太坂を越えるまで、厳しい勾配の上りが続くのだ。

ここが難所と覚悟して、歩き始めた。息が弾み、足が疲労で重くなる。同行者同士、声を掛け合いながら山坂を登るが、まだ先は見えない。「おーしんどい」という声が後ろから聞こえ、「そればあ大きい声が出るなら大丈夫！」と別の声が掛かる。笑い声此起彼伏見上げた先に、追剥峠という物騒な名前の峠が見えた。

峠越えを無事果たし、遠くの山並みを眺めながらしばしば歩くと、黒見休憩所に着いた。水筒の冷たいお茶でのどを潤せば、生き返ったような気持ちになった。

谷を渡り、野道を行き、県道を横切る。道中には弘法大師や平家にまつわる伝説が残り、歴史の深さを改めて感じる。

そうして、ついに文代峠へとたどり着いた。

文代峠からは、まだはるか先の赤岡の海が望める。さわやかな風を感じながら、昔の人もここから海を眺めたことだろうと思う。赤岡から来た人はいままでの道のりを振り返り、物部から来た人はこれからの歩みに思いを巡らせる。

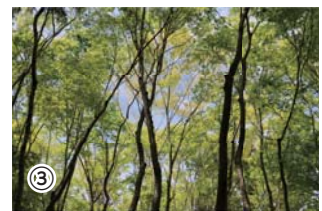
ここで昼の休憩を取り、特製の竹弁当を堪能する。山菜の滋味あふれる味わいにほっとさせられ、体に力がみなぎってくるようだ。

ここから先は香南市。歴史が深く、多くの史跡が残るまち歩きへと続く。ガイドを伴えば、いろいろな歴史の話が聞けるはずだ。

さあ行こう。山を越え、谷を越え、歴史の道をたどりながら、海に出会う感動が待っている。



①軽快に歩く旅の序盤 ②満開のシャガが心を癒やす ③木漏れ日の木立 ④四季折々の山の幸を味わう竹弁当



### 赤岡塩市のはじまり

今から440年前、日和佐城主の弟として生まれた濱五郎兵衛（幼名・新次郎正儀）は、13歳のとき長宗我部氏に帰順。兄の肥前守が戦死したのをきっかけに武士の身分を捨てて大坂天満へ隠居していたが、30歳のとき、長宗我部元親からの要請を受け、赤岡で塩の製造を始めました。その頃から赤岡一帯の海浜では塩作りが盛んとなり、塩市が立つようになったと言われています。

逆に奥地からは、材木や農産物、和紙などが送られたことでしょう。水銀の存在を暗示する蕪生（丹生=にゅう）という地名から、赤岡へ水銀が送られ、その水銀を原料とした朱色の顔料で、絵金が浮世絵を描いたのではという話もあります。

### 文代峠の由来は文四良さん

文代峠の周辺の土地は、峠ではあるものの平坦な土地が多く、昔から多くの人々が住み着いてきました。往来が盛んだった頃には宿場や店屋があり、塩の道の拠点として栄えていたそうです。現在では宿場跡が残り、当時をしのばせています。

文代峠の文代とは、この土地を開いた人物の名が由来。長宗我部地検帳によると、『西川文四良吉康』という名で、いつの頃からかその名が転じ、文代峠と呼ばれるようになりました。

### 源太物語

源太という歌の上手な若者が、於雪という16歳の人妻と恋に落ち、夫の目を盗んでは逢瀬を楽しむようになりました。しかし人妻である於雪と夫婦になることは叶わない。2人は「来世で一緒になろう」と誓い合い、心中の約束をしました。

しかし、於雪にきれいな晴れ着を着せてやりたいとの一心から、源太は罪を犯してしまいます。小さな店屋を営む老夫婦を脇差で刺し殺し、金を奪ってしまったのです。翌朝集落中が大騒ぎとなり、すぐに源太の仕業と分かり捕らえられました。

赤岡の奉行所に連れて行かれる途中、庄谷相の馬頭観音の前に差しかけたとき。源太は捕吏に、「故郷の横山を見るのもこれが最後。なにとぞひとつ、歌を歌わせてくださませ」と頼みました。捕吏の慈悲で歌うことを許された源太は、横山の景色を見ながら於雪に届けと声を張り上げ、得意中の得意『心中道中』を歌い上げました。

源太は赤岡の奉行所に着いた翌日に首をはねられ、20歳の生涯を閉じました。

